様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１３２１９

研究課題名（和文）ラオスにおけるムラブリ語とスマ語の緊急調査

研究課題名（英文）Urgent research on Mlabri and Suma in Laos

研究代表者
加藤　高志（Kato, Takashi）

名古屋大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：２０３７７７６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ラオスで話されている消滅の危機に瀕している2つの言語、モン・クメール系の言語であるムラブリ語（人口約20人）とチベット・ビルマ系の言語であるスマ語（人口約50人）を対象に、語彙調査と文法調査を行った。また、両言語の周辺で話されている言語の語彙調査も行った。その結果、ムラブリ語は子供世代によって話されており、世代間の継承が行われていることが分かった。これに対して、スマ語のもっとも若い母語話者は30代であり、それ以下の世代のスマは村における多数派言語であるプーニョート語を母語として話しており、世代間の継承は行われていないことが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ラオスのモン・クメール系の民族のうちもっとも人口が少ないと考えられるムラブリは、森の中を移動しながら生活しており、その人口は17人しかいないということが分かっていた。そして、ラオスのチベット・ビルマ系の民族のうちもっとも人口が少ないスマ（公式民族名称はコンサート、自称はスマ）は、村が1つしかなく、2015年の国勢調査の時点でその村の多数派民族はプーニョートであり185人いるのにたいして、スマはたった51人しかいないことが分かっていた。両言語とも消滅の危機に瀕しており、言語が消滅する前に記録しておく必要があった。本研究はそのための一歩である。

研究成果の概要（英文）：I conducted lexical and grammatical survey on two endangered languages spoken in Laos: Mlabri (Mon-Khmer) and Suma (Tibeto-Burman) as well as other languages spoken around these two languages. The research shows that Mlabri is spoken by children and transgenerational transmission is ongoing. On the other hand, the youngest Suma native speakers are in their 30s and Suma under 30's speak Phunyot, which is a majority language in their village, as their mother tongue and transgenerational transmission is not observed.

研究分野：言語学

キーワード：ラオス　危機言語

１．研究開始当初の背景

外国人が調査許可を得るのに多大な困難（手続きの煩雑さ、人脈および金銭が必要なことなど）が伴うラオスにおいては、1998 年まで、少数の例外を除き、先行研究と呼べるものがほとんどないか、まったくない言語ばかりであった。このような状況のなか、研究代表者は、1998 年から現在に至るまで、ラオスの北部全体において、ラオスのチベット・ビルマ系の言語はほぼすべて（約 20 言語）、ラオスのモン・クメール系の言語のうち、クム語派およびパラウン語派（北部に分布する 2 つの語派）の言語はすべて（約 15 言語）調査してきた。この過程で、ラオスのモン・クメール系の民族のうちもっとも人口が少ないと考えられるムラブリは、2013 年 3 月の時点で依然としてサイニャブーリー県ピアン郡の森の中を移動しながら生活しており、その人口は 17 人しかいないということが分かった。そして、ラオスのチベット・ビルマ系の民族のうちもっとも人口が少ないスマ（公式民族名称はコンサート、自称はスマ）は、村がウドムサイ県ナーモー郡に１つしかなく、2015 年の国勢調査の時点でその村の多数派民族はプーニョートであり 185 人いるのにたいして、スマはたった 51 人しかいないことがわかった。ムラブリ語については Rishcel が調査を行ったものの、Rischel (2007)等に断片的なデータを発表したのみで、まとまった成果を出版することなく 2007 年に亡くなってしまった。人口の少なさを考えると、調査を早急に行う必要があったため、研究代表者は 2013 年 3 月および 2014 年 12 月に合計 4 人のムラブリ語話者に対して調査を行ったが、そのデータは質的にも量的に不十分であった。(2)また、スマ語については、Kato (2008)において 303 項目の語彙を発表済みであり、これに加えて、Bradley (1979)にある 866 項目からなる語彙調査票による語彙調査と私が作成した簡単な文法調査票による文法調査が終わっていたが、人口の少なさを考えると、追加の調査を早急に行う必要があった。加えて、ムラブリは森の移動民であるが、物々交換のために周辺の民族と接触することが報告されていた。また、スマ語はプーニョートが多数派である混成村で話されている。そして、スマはプーニョート以外に、周辺の民族のモトゥ、ルーとも頻繁な接触を行っていることが分かっていた。ムラブリ語、スマ語のような消滅の危機の度合いが高い言語は、他言語からの影響を受けやすいため、言語接触的状況を明らかにする必要があった。

２．研究の目的

以上の状況を踏まえて、本研究では、①ラオス北部で話されている言語のうち、人口が極めて少ないために緊急の調査が必要な 2 つの言語、すなわち、モン・クメール系クム語派の言語であるムラブリ語（人口約 20 人）とチベット・ビルマ系ロロ諸語の言語であるスマ語（人口約 50 人）を対象に、語彙調査、文法調査、物語の収集・分析を行うことにより、両言語の全体像を捉える記録を行うこと、②両言語の周辺で話されている言語（スマ語の周辺言語としてプーニョート語（チベット・ビルマ系）、モトゥ語（チベット・ビルマ系）、ルー語（タイ・カダイ系）、ムラブリ語の周辺言語としてフモン語（フモン・ミエン系）、ミエン語（フモン・ミエン系）、プライ語（モン・クメール系）、ニュアン語（タイ・カダイ系））の語彙調査を行い、両言語の言語接触的状況を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究が対象とする言語の研究の進捗状況は言語によって異なっていた。そのため、それぞれの言語の研究の進捗状況に応じて、調査を進めることになった。スマ語については、本研究開始前に、A 氏（1940 年代生まれ）、B 氏（1950 年代生まれ）、C 氏（1970 年代生まれ）の 3 人の話者の言語データを収集済みだった。本研究開始時に A 氏は亡くなっていたため、B 氏と C 氏に対して調査を行うことにした。媒介言語であるラーオ語の理解力が高いため、主なデータは C 氏から得ることにした。B 氏については、Bradley (1979)にある 866 項目の語彙調査票による語彙調査、および私が作成した基礎的な文法調査票による文法調査が終わっていた。そして、C 氏については、Thongphet and Shintani (1999)にある 303 項目の語彙調査票による語彙調査、基礎的な文法調査、866 項目の語彙調査が終わっていた。プーニョート語については、303 項目の語彙調査が終わっていて、866 項目の語彙調査も途中まで終わっていた。モトゥ語については、1 人のインフォーマントに対して 303 項目の語彙調査、866 項目の語彙調査、基礎的な文法調査が終わっていたが、ラーオ語の理解力に問題があったため、あらたなインフォーマントを探して調査を行うことにした。ルー語については、未調査であった。ムラブリ語については、すでに D 氏、E 氏、F 氏、G 氏の 4 人のインフォーマントに対して 303 項目の語彙調査が終わっていた。加えて、E 氏、F 氏、G 氏については 866 項目の語彙調査のうちほんの最初だけ調査が終わっていた。この 4 人のうち、D 氏は媒介言語であるラーオ語の理解力がもっとも高く、比較的頻繁に村に現れ、出会うことが容易なため、主なデータは D 氏から得ることにした。プライ語については、複数の村で調査済みであったが、ムラブリの居住域に近い村においては 303 項目の語彙調査が終わっていた。フモン語、ミエン語、ニュアン語については、ムラブリの居住域に近い村においてはデータがなかった。

2016 年度は、2016 年 12 月および 2017 年 1 月に 16 日間、2017 年 3 月に 16 日間、調査を行った。調査した言語は、ムラブリ語、スマ語、プーニョート語、モトゥ語、ルー語である。ムラブリ語については、E 氏に対して収集済みの 303 項目の語彙のチェックを行い、さらに Diffloth (1980)にある 604 項目の語彙調査票を用いて語彙調査を行った。スマ語については、

C 氏に対して収集済みの 866 項目の語彙のチェックを行い、さらに黄(1992)にある 1822 項目の語彙調査票を用いて語彙調査を行った。また、B 氏に対して、1822 項目の語彙調査票を用いて語彙調査を行った。プーニョート語については、収集済みの 303 項目の語彙のチェックを行い、収集済みの 866 項目の語彙のチェックを行い、そして 1822 項目の語彙調査票を用いて語彙調査を行った。モトゥ語については、収集済みの 303 項目の語彙のチェックを行い、収集済みの 866 項目の語彙のチェックを行い、そして 1822 項目の語彙調査票を用いて語彙調査を行った。ルー語については、303 項目の語彙調査票を用いて語彙調査を行った。

2017 年度は、2018 年 3 月に 21 日間、調査を行った。調査した言語は、ムラブリ語、スマ語、プーニョート語、モトゥ語、フモン語、ミエン語である。ムラブリ語については、未調査の話者 H 氏と調査済みの話者 D 氏、合わせて 2 名の話者に対して調査を行った。H 氏に対しては、303 項目の語彙調査を行った。D 氏に対しては、収集済みの 303 項目の語彙のチェックを行い、さらに 866 項目の語彙調査を行った。スマ語については、C 氏に対して、収集済みの 303 項目の語彙および 866 項目の語彙のチェックを行い、そして 1822 項目の語彙調査票を用いて語彙調査を行い、さらに基礎的文法調査のチェックを行った。また、C 氏に、スマ語を母語として話せるスマを列挙してもらった。プーニョート語については、収集済みの 303 項目の語彙および 866 項目の語彙のチェックを行い、1822 項目の語彙調査票を用いて語彙調査を行い、さらに基礎的な文法調査を行った。モトゥ語については、収集済みの 303 項目の語彙および 866 項目の語彙のチェックを行い、そして 1822 項目の語彙調査票を用いて語彙調査を行った。フモン語とミエン語については、303 項目の語彙調査を行った。

2018 年度は、2018 年 12 月から 2019 年 1 月にかけて 14 日間、2019 年 3 月に 24 日間、調査を行った。調査した言語は、ムラブリ語、スマ語、プーニョート語、モトゥ語、フモン語、プライ語、ニュアン語である。ムラブリ語については、未調査の話者 I 氏と調査済みの D 氏、合わせて 2 名の話者に対して調査を行った。I 氏に対しては、303 項目の語彙調査を行い、そのチェックを行い、866 項目の語彙調査票を用いて語彙調査を行った。D 氏に対しては、収集済みの 303 項の語彙のチェックを行い、866 項目の語彙調査票を用いて語彙調査を行った。スマ語については、C 氏に対して、収集済みの 866 項目の語彙のチェックを行い、収集済みの 1822 項目の語彙のチェックを行い、B 氏に対して、収集済みの 303 項目の語彙のチェックを行い、収集済みの 866 項目の語彙のチェックを行った。プーニョート語については、収集済みの 303 項目語彙のチェックを行い、収集済みの 866 項目の語彙のチェックを行い、基礎的な文法調査を行った。モトゥ語については、収集済みの 303 項目の語彙のチェックを行い、1822 項目の語彙調査票を用いて語彙調査を行った。フモン語については、2017 年度に調査した村とは別の村で 303 項目の語彙調査を行った。プライ語については、収集済みの 303 項目の語彙のチェックを行い、604 項目の語彙調査を行った。ニュアン語については、303 項目の語彙調査を行った。

４．研究成果

ムラブリについては、2019 年 3 月時点で、サイニャブーリー県ピアン郡情報文化観光事務所が把握しているムラブリの人数は 19 人であった。本研究開始以前には、このうち 4 人の話者の言語データを入手済みであったが、本研究においてはこの 4 人のうち 1 人と継続して調査を行い、さらに新たな話者 2 人の言語データを入手することができた。すなわち、これまでで、19 人のうち 6 人の話者の言語データを入手することができたことになる。このうち話者 I 氏は 10 代半ばであり、ムラブリ語の世代間の継承は行われていることが分かった。また、ムラブリ語の周辺で話されている言語の中では、ラーオ語からの借用語がもっとも多いことが分かった。

スマ語については、聞き取り調査によって、2018 年 12 月の時点で、母語話者は 15 名であること、夫と妻の両方がスマである夫婦が 1 組もおらず家庭内でスマ語は使われていないこと、もっとも若いスマ語の母語話者は 30 代であり、それ以下の世代のスマの母語は、村における多数派言語であるプーニョート語になっており、世代間の継承は行われていないことが分かった。そして、スマの周辺で話されている言語の中では、ラーオ語からの借用語がもっとも多いということが分かった。また、物語などの口頭伝承を語れる人はいないということも分かった。本研究の開始時点では、物語の収集・分析を行う予定だったが、これはできなかった。

＜引用文献＞

①Bradley, David (1979) *Proto-Lololish*. London and Malmö: Curzon Press.
②Diffloth, Gérald (1980) The Wa languages. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 5.2.
③Kato, Takashi (2008) *Linguistic survey of Tibeto-Burman languages in Lao P.D.R.* Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.
④Kingsada, Thongphet and Tadahiko Shintani (eds.) (1999) *Basic vocabularies of the languages spoken in Phongxaly, Lao P.D.R.* Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.
⑤Rischel, Jørgen (2007) *Mlabri and Mon-Khmer: Tracing the history of a hunter-gatherer language.*Copenhagen: Det Kongelige Danske Videnskabernes Selskab.
⑥黄布凡（主編）（1992）『蔵緬語族語言詞彙』北京：中央民族学院出版社.

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計１件）
①Kato, Takashi (2018) An interim field report of Suma and Mlabri: Two endangered languages of Laos. 51st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics. 査読有

〔図書〕（計１件）
加藤高志 (2019)「少数言語と消滅危機言語」『東南アジア文化事典』198-199.丸善出版.

６．研究組織